



毒婦の業火

(毒婦の渴き・改編)

渚 まこと

毒婦の業火（毒婦の渴き・改編）

【1】

>

午前二時過ぎ、賀屋義紀はスマホの澄んだコール音で目覚めた。

隷愛する師匠・早月杏里からだ。

「シャワーを使って、私の寝室に来て……」

真夜中なのに、艶やかな声が妖しい。

毒婦と呼ぶ早月杏里何を望まれるのか、分かっている。

義紀彼女に使う毒婦という言葉に由来はないが、奸婦と呼ぶよりインパクトが強く、絶対的存在感があり、彼女自身も毒婦と自認している。義紀の主観で麗しきという形容詞がつく。麗しき毒婦・早月杏里に飼われる身だから、常に買主の意に隷従する習性を植え込まれている。麗しき毒婦の忠奴を認じ、凄味のニンフォマニアの別貌を持つ彼女との濡場では、どんな欲求にも応じられる性奴を役を本音で悦受している。

熟睡した真中露美を起こさないように気を付け、ベッドから出た。

十余前に夫を不測の交通事故で喪い、中産階級の早月家を受け継ぎ、以後シングルを通す早月未亡人……新興華道の家元でもある支所に忠奴の首輪をつけられてから九年余経過した。師匠、もしくは家元と呼ぶ飼主への絶対忠従の習性は、例え真夜中でも変わらない。

『師匠はマルチ秘書・飛高真希と同衾してるのに……』

瞬時、怪訝に思ったが、濡場で凄艶な性魔の別貌を顕わにする師匠の意には逆らえない。隷従しなければ、どんな報復を受難するか分からない。隣接の専有バス・ルームでシャワーを使って新しいバス・ローブで身を包み、女主人への隷愛心を疼かせた。

>

師匠のシティ・シックなインテリアの寝室の広さは約四十八ヘーベ。暖色系間接照明がムーディな照度にコントロールされている。

キング・サイズのオリジナル・ベッド上の全裸の女と女……師匠と真希の耽美なからみに見入った。アダルト・ビデオのレズ・シーンが色褪せるほどのエロジナス・スケープに触発され、劣情を滾らせた。

凄艶な性魔の別貌を顕わにした師匠……三十歳過ぎで加齢を止めた早月杏里と、彼女のマルチ秘書……クールな個性美で魅せる二重が際の才女がからむ濡

絵半端ではない。直ぐ、師匠にタフなペ*スと折紙をつけられたシンボルを凶淫に猛らせた。

義紀が主観でイメージするウェヌス像に近似した師匠と、琥珀色の雌豹を想わせる真希のボディ・プロフィールを熟知している。

幾つもの貌を持つ早月杏里のエイジレスな女身は絶品だ。艶張りが妖しい絹肌は真珠色。麗淑な彫りの小貌を際立たせる濡れ羽色のミディアム・ヘア。身長一六九。B八四・W六〇・H八六……義紀が主観でイメージするウェヌスの裸像に近い。

飛高真希の琥珀色の雌豹を想わせる妖熟の女身は邦人離れしている。知的に彫刻された小貌。艶やかな珈琲色のショート・ヘア。身長一七〇。B八三・W五八・H八五。スレンダーな女身の魅せる個性美が冴えている。

義紀は隷愛する早月杏里の淫逸なセクシュアリティ、男性器折檻具にもなる凄味の名器を知り抜き、師匠を執愛する真希の突出したセクシュアリティ、ペ*ス喰いの名器も熟知している。

照度が絶妙に絞られた二基のフロア・スタンドのシルキー・ゴールド灯りが寝室の妖しい雰囲気をもより深めている。全裸でからみ合う師匠と真希がつくるレアな猥眺……卑猥な大股裂きポーズを悦受した真希の脚間に伏せた師匠が真希の秘部を糜爛に弄姦する濡絵に魅入られた。

「義紀、早くバックから挿れてっ」

と、ぬめった声で命じられた。

『真夜中に、こんなに素晴らしいご馳走を頂けるなんて、性奴冥利につきる』

心裏で本音を呟いた。ベッドに上がって師匠の脚間で膝立位になると、エロジナスに張ったヒップを突き上げられ、性蜜まみれの秘部を見せ付けられて舌舐めずりした。

『こんなペイトを喰らえるなんて、罰が当たりそうな果報だ』

錯愕した。九年間余、欲情した師匠との濡場で性奴の矜持を猛らす習性は変わらない。絶対忠誠を誓う飼主のエロジナスに張ったヒップを両手で掴み、淫通を覚えるほど充血したペ*スを反り上げた。

『絶対存在の飼主をバックから姦る悦楽に勝る悦楽はない』

心裏で呟きを重ね、異様なまでに張り出たグランスの先端を性蜜まみれのスリットに当てた。

「何を躊躇ってるの。お前が欲しくてたまらないプ*シーでしょ」

ヒップをうしろに突き出され、グランスをヌルツと銜え込まれた。

「根元まで突き込んでから、真希のヨガリ狂いを見ながら抜き差しして……」

淫蕩な性情を剥き出した師匠の言葉が睦言のように聞こえ、淫血を沸騰させて嬉々と隷応した。

「オォーン、美味しい。極太のグランスがたまらない」

義紀もたまらずに、

「ウツウツ……」

と、悦呻した。

途端に、怖いほど発達した膣周囲筋をギュツと締められ、

「ウグツ……」

と、淫呻した。

「気持ちイイツ？」

「脳裏が痺れる……」

「性奴らしい言葉を使いなさい。飼主の私を怒らせたいの？」

性奴と呼ばれて妖しい被虐悦で淫血がより熱くなり、絶対君臨の麗しき毒婦に刷り込まれた女尊男卑のイズムが覚醒した。

「許して下さい」

心底から許しを請うた。

「サドっぽく姦って、私をアクメに舞わせてっ。でも、ヒップに爪痕を残さないでね」

嬉しげに頷き、師匠の薄い汗なお膜で覆われたヒップを掴んだ両手の力を緩めた。

>

世間に対する早月家のガードは堅い。

真夜中、ソドムと化した寝室で繰り広げられる三つ巴の性宴も、プライベートの分厚いベールで包まれている。三者に知られる危惧は皆無。デカダンな性生活はほぼ完璧に隠蔽されているから、欲した時に身内の耽美なからみを堪能できる。

麗しき毒婦の忠奴、性奴を自認する義紀にとって、濡場で凄艶な性魔に化ける師匠がからむ三つ巴の性宴は別格だ。その濡場で師匠の性奴になる悦びを形容する言葉がない。

「義紀、仰向けになりなさい」

小貌を妖艶な夜叉面に近づけた師匠に命じられてベッド上で仰臥し、嗜虐プレイに馴れた真希に緊縛用の柔らかな革紐を使われ、萎えないペ*スを根元まで晒け出す四肢裂ポーズに辱縛された。

「真希、義紀の股間に跨がって腰を沈めて、猛々しく反り上がったペ*スを呑み込んで……」

濡場でタフなニンフォマニアの別貌を顕わにする真希の性欲は底知れない。

直ぐ股間に跨がられて騎乗位になられ、異常勃起を続けるペ*スをヌルヌルッと根元まで喰らい込まれた。

「オウン、はち切れそうに怒り狂ってる……」

日常、個性的な才女のマスクで惹く真希は、濡場では淫魔の別貌を顕わにする。早月家のマルチ・バトラー・真中露美と、彼女の分身……十五歳の美魔少女・真中聖香と同じように早月家女当主に絶えない性鎖で繋がれている。縁故者ではないが、シティ・パーク・サイドに建つ高級マンション・最上十七階の早月家に棲む家人の一人だ。

師匠に悦悶の貌を覗き込まれた。

「ウフフッ、真希、義紀のペ*スはどう？」

「猛り狂ってる……」

「クスリが効いてるのよ」

「エッ、寝室に来る前に、あの即効性のクスリを服んだの？」

真希が嬉しげに問い返した。

「そうよ。義紀の悪魔的なポテンツにも限界がある。アンネが終わった露美に欲しいだけザーメンを搾り取られたから、自分の意思であのクスリを服む分別はあるわ」

義紀は事実を抉られ、真希に根元まで呑み込まれたペ*スをドクツドクツと脈打たせた。

膣周囲筋をキュッと縮めた真希に、

「淫貪な露美に、幾度、ザーメンを搾り取られたの？」

と、詰問調の睦言を浴びせられ、腰を小刻みに揺すられた。異様なまでに発達した括約筋でペ*スの付け根を強烈に絞められ、膣周囲筋を強く締められたペ*ス喰いの名器のタイト感がたまらない。性蜜が淫潤でねければ、性拷問に等しい。辱縛されて上から姦られる被虐性悦を表す言葉がない。

「四度、絶頂を強いられた……」

正味を答え、異常発情した露美との苛淫なコイタスを生々しく思い出した。

「マァッ、四度も、ハニー・ブレイクなしに？」

「少し萎えかけても、すぐ露美の中で蘇ってしまい、サド雌っぽく燃える露美の意のままに姦られた」

真希との原色の睦言のからめ合いに、師匠のサドっぽい睦言がからんだ。

「真希っ。思いっきりペ*スをいたぶってっ。クスリが効いてる二時間余は絶対に萎えないから、ザーメンが枯れても絶頂責めの折檻を愉しんで……」

「嬉しい。たつぷりと折檻してやる」

真希の双眸が妖しく煌めいた。義紀のマゾ性が増幅し、真希と義紀の嗜虐交尾に見入る師匠の妖気を感じて瞼を軽く閉じた。

「ウフフッ、愛しいスレーブの貌に跨がってやる」

淫卑な予知通り、貌上で女軀を逆向きした師匠に跨がられ、異形の岩清水のポーズをつくられ、蜜でぬめった秘部を口にあてがわれた。

極旨のご褒美だ。

絶対隷愛する師匠の性蜜は即効性のハード・ドラッグに等しい。口で知覚するレアな秘肉感がたまらない。僅かに残っていた理性が飛散し、女尊男卑のイズム、性奴の矜持がより冴えた。

「本当に愛しいスレーブっ。真希と二人で、たつぷりと可愛がって上げる」

師匠の魔淫な睦言が愛囁のように聞こえた。

「ヒロインの太いスティックを挿れてるみたい。無数のペ*スを挿れてきたガーリーでも、一度、師匠に飼われる義紀の猛り狂うペ*スを挿れたら、間違いなく虜にされるわ」

真希の睦言に煽られた。

ほぼ一時間半、性快楽の具にされた。辱縛されたままハニー・ブレイク抜きで、猥虐姦される悦楽に惚けた。

【2】

>

午前六時半過ぎ、眠りから覚めた。

同衾していた露美が先に目責め、ベッドから出たことを知っていた。就眠時間実質二時間半程度だが、淫裂なセックスの疲れは嘘のように拭われていた。

隣接のバス・ルームに移って少し熱めのシャワーを使い、新鮮なフローラルな芳香が残るトレーナーを着て朝陽射して明るいダイニングに行き、露美が用意した朝食を済ませた。

ダイニングに続いたりビングのソファに腰掛けた露美の分身・真中聖香がテレビを観ている。カトリック系女子高校のブレンな制服が憎いほど似合っている。オールマイティの家人の露美は朝食の後片付けを済ませ、師匠の書斎

の掃除に取り掛かったようだ。

聖香が腰掛けたソファに腰掛け、記憶回路から一昨夜の聖香との濡場を呼び覚まし、シンボルを充血させた。義紀と内縁の義父娘関係にある聖香は、義紀がイメージするフェアリーのような容姿が冴える美魔少女だ。だが、母の淫血を継ぐ早熟の女身はすでに成人女性と変わらない。セックスの美味しさを知り知っている。淫逸なセクシャリティに驚嘆する。無論、母・露美に類似した性愛観を持つ。母の内縁夫の伽耶義紀をパパと呼び、義父になる義紀のペ*スを喰らっているが、相姦関係を邪としない早月家に棲む女だから驚きには当たらない。

「昨夜、パパを欲しだけ食べたママは、師匠の書斎を掃除してるわ」

「そのようだな。書斎の掃除は手間取るから、手伝おうかな……」

ソファから立ちかけると、

「かえって邪魔になるわ。手伝わずに、愛しい義娘を抱いて……」

と、迫られた。

聖香は登校に一時間を要する。七時半に出ないと遅刻する。

「もう、七時十分前だよ。時間がないよ」

優しく駄目を出した。

「八時半までに校門を入れればセーフだわ。パパが車で送ってくれたら、三十五分で着く。アンネが近づくと、無性にセックスしたくなるの。登校前に好きなパパと交尾んでチャージしたい。脳裏が冴えて、身体に不可思議なパワーが漲るから……」

嬉しい我が儘をいわれ、

「登校前にセックスするなんて、本当にいけない義娘だ。ママに叱られる」

と、優しく決め付けた。

「ウフフッ、パパのペ*スはもうエレクトしてるわ」

馴れた所作で股間を撫でられた。

登校前の聖香と交尾むのは珍しくない。

汚れのないフェアリーを想わせるマスクからは想像もつかない両性を喰らう美魔少女……妖魔の申し子の早熟の裸身は成熟女性並みだ。抜群なセクシュアリティ、名器といえる天与の女性器、母の露美に類似した淫乱な性情、底知れない性欲は並みの形容を寄せ付けない。

既存の性道義、性秩序を嘲る性魔の別貌を持つ師匠・早月杏里、セックスをエナジーにする師匠のマルチ秘書の真希、日常、非日常を問わずパパと呼ぶ義紀とリンクし、性快楽を飽食している。しかし、鬼畜に墮ちる母娘同性愛はタブーにしている。厚いベールで包まれた早月家では珍しくない身内女性のオーギー・パーティでも、異常発情した母とからむ修羅の絵は描かない。

『聖香は妖魔の申し子だ。将来、どんな毒婦に進化？するのだろうか。行く末が怖ろしい』

愛しい聖香の行く末が案じられる。

「時間が惜しい。ここで……」

欲情を隠さない聖香はもどかしげにスカートをたくし上げ、マット・ブラックのセミ・ビキニを捲り取って淫麗な下半身を剥き出した。朝陽に映える細身の裸婦像の下半身のように眩しい。

美魔少女の妖気を感じ、瞬時、たじろいだ。

「師匠は、五時半過ぎ、真希さんがハンドルを握るセダンで出掛けたわ。午前十時に、金沢で絵の取引がある、とママから聞いた……」

「知ってる」

「ママはパパと私のコイタスを見馴れてるから気にしなくてもいい」

聖香の手で下半身を生にされ、凶淫に猛りに猛ったペ*スを熱い眼差しで舐められた。

「生唾が出る。凶器のようにエレクトしてる……」

「少女が口にする台詞ではない。校則、規律の厳しいカトリック系女子高校徒なのに、罪の意識はないの？」

聖香に取っては無意味な諫めの言葉が唾言っばい。シンボルをあけすけに褒められ、舞い上がる気持ちを抑えた。

「リンクした師匠をオーママと呼ぶ私もセックスをエナジーにする女よ。罪の意識など露ほどもない。身内男女の相姦性交は早月家のセクシュアル・カルチャーでしょ。淫奔なセックス・ライフを享樂して何が悪いの？」

反り上げたシンボルに居直りの言葉を囁かれ、数分間、愛しげにフォラチオされ、

「パパって本当にタフッ。昨夜、ママにザーメンを搾り取られた後、師匠と真希さんに無慈悲に姦られたのに、はち切れそうに猛ってドクドクと脈打っている……」

「何故、知ってる？」

「私、真夜中の二時半頃まで、好きな歴史本を読んでいたの。パパとママの寝室と師匠の寝室、ドアが細く開けられてたから、盗視した……」

「エッ、ドアが細く開けられてた？」

「コイタスの卑猥、淫靡な音声がもろに洩れてたわ。私を惹き寄せて、盗視させる意図が見え見えだった。寝室に入ってからみたい欲望を抑えて、刺激的な盗視を愉しんだ。レアな性教育になる……」

「……………」

刹那、唾然とした。

聖香が身体を起こして義紀の太腿に跨がると、

「皺になるから脱いだ方がいい」

と囁き、手馴れた所作で愛しくてたまらない美魔少女を全裸にした。フェアリーイメージとは異なる麗熟した裸身……欲情した二十歳過ぎの成人女性と変わらないエロジナスな女身な性匂が香しい。

頸に両腕を巻き付けら、

「少し腰を前にずらせて……」

と囁かれ、桃尻を両手で抱き上げて腰を二十センチほど前にずらせた。

阿吽の呼吸で唇を合わすと、交尾馴れしたガーリーのようにグランスを銜え込まれ、ヌルヌルッと根元まで呑み込まれた。天与の名器を実感し、淫血が逆流するような魂の震えを覚えた。

「オォーン、美味しい。大好きなパパのタフなペ*スは最高……。私、あのセレモニーを忘れられない。私の初めての男は、師匠にスレーブの首輪をはめられたパパよ。ママの内縁の夫だから、陳腐な性概念では近親相姦になるわ。凄艶な妖魔の別貌を顕わにした師匠の眼前で処女を奪われたセレモニーは、約一年前よ。覚えてる？」

「よく覚えてる……」

「すでに淫らで賢いパイプを挿れ馴れてたし、師匠のペッティングとクリニグスで性蜜の坩堝にされたプ*シーは、パパの凶淫に猛ったペ*スをスムーズ

に呑み込んだでしょ」

「聖香は分身のいない師匠が事実上の養女にする珠玉の美魔少女だ。師匠の寝室で、師匠に抱かれていた聖香と交尾むように教唆されて感激し、聖香と一つになって感動した記憶は永遠に掠れない」

そのシーンを生々しく蘇らせた。

「私、師匠にリンクを示唆されたパパ以外の男と交尾んでること、知ってるでしょ？」

「およそ、知ってる……」

「告白する。二番目の男は師匠に示唆されて交尾んだ生臭坊主。その次の師匠に示唆されて交尾した男は春画収集家……富豪の色魔老人。四番目の男は華道華杏の会の家元……師匠の有力後援者。保守系府会議員の五十歳代後半の隠れエロトマニア。パパ、妬ける？」

「三人の男とのセックスは美味しい？」

囁きに嫉妬が混ざる奇怪な憤りを滲ませた。

「私の性を有効に使う師匠に示唆された情事だと割り切ってる。でも、セックスは愉しまないと損だから……」

奇怪な憤りを抑えたが、聖香の中のペ*スの強い脈打ちは抑えられない。

「春画マニアの好色老人とのセックスは、師匠の別の貌、(株)ギャラリー・杏里・社長が春画の好色老人に売った後にセッティングされるから、ビジネスの条件にされてるようだよ。華道・華杏の会代表……家元を支援する隠れパトロンの府会議員との情事もビジネスからみのように、月に二・三度。師匠に金を貢ぐ性豪の生臭坊主とのセックスは不定期で、月に四・五度。でも、私はセックスを愉しんでるだけだけ。愛する男はパパだけよ」

内心の奇怪な嫉妬を握り潰し、

「私は師匠に飼われる奴隷だよ。そんな男を愛せる？」

と、聖香の本心を問い質した。

「私だって、ママと真希さんと同じように師匠に飼われる女よ。飼われるという言葉は、主従関係の強靱な絆と同義だと思う。早月家ファミリーの強烈な身内意識は、既存の性秩序を嘲る相姦関係から生まれてるのに……」

「聖香らしい分析だ」

心裏で聖香の台詞に同感した。愛という言葉の魔力を感じ、両手で瑞々しく張った桃尻を掴んで腰を細かく揺すった。

「アフツァアフツァフツ、気持ちイイ……」

理屈なしに愛しい聖香の浅ましいヨガリ声が嬉しい。

だが、フェアリーの容姿で魅せる美魔少女の極上の性をビジネスにからめて利得を増やす師匠の奸辣な所業が恨めしい。聖香の天与の名器にペ*スを挿れる色情狂男への奇怪な嫉炎に妬け、呪い殺したいほどの憎悪を覚えた。

「三人のエロトマニアのペ*スは美味しい？」

「パパの馬鹿……。私の魂まで蕩かすパパのペ*スの方がずっと素敵よ。クスリで気違いじみたポテンツを得る春画マニアの好色老人のペ*ス是不味くはないけど、パパのより一回り格下よ。壮年の府会議員は濡場で色情狂に化けるけ性豪のペ*スのかたちとボリュームは、パパのシンボルよりかなり見劣りするし、猥褻大好きのスケーバーなのにセックス・スキルはさほどでもない。文字通りの生臭坊主のペ*スは発情期の雄虎の性器もどきで、性餓を癒やしたい富豪檀家の有閑夫人を悦ばす性豪ぶり抜群だけど、私は愛とは別物の性快楽を貪るだけよ」

「でも、アクメを得てる……」

「当たり前でしょ。師匠のビジネスに組み込まれた情事でも、アクメを得られないセックスなんて無意味なもの」

聖香のドライな割り切りに舌を巻いたが、師匠と呼ぶ麗しき毒婦と密に気脈を通じる聖香……フェアリーの容姿で魅せる美魔少女にぞっこんのリッチな三人の男を手玉にする師匠の奸辣な手法が透けて見えた。

『自分は女尊男卑のイズムを飼主・早月杏里に刷り込まれた男だ。聖香の魔性を熟知する師匠の忠奴を自認している。魅入られた麗しき毒婦の奸辣な所業を云々できる身ではない』

忠奴の自意識、隷愛する師匠への隷従心をどうすることもできない。

言葉を返せず、しばし沈黙した。

「身内ではない二人の同性とリンクしてるわ」

「やはり師匠の示唆で？」

「一人は師匠に抱かれるように示唆された師匠のパトロン。実年齢は四十歳代半ばなのに一回り若い富豪未亡人・江嶋艶伽……」

「彼女と聖香のリンクは知っている。今一人の女は？」

「師匠の悪辣な意図に添う自分の意思でリンクした女よ。クリスチャンの担任女性教師・根岸真実。年齢は二十九歳。魅せるシスター・キャラとは裏腹な隠れ淫乱女だわ」

「エッ、担任の女性教師？」

鸚鵡返して問い、未知の女・根岸真実に不埒な興味を抱いた。

「女というイキモノは化け物よ」

「驚きだ。校則、規律が厳しいカトリック系・名門女子学園の教師なのに生徒とリンクするなんて……」

啞然とした。

「信仰する宗教、職業は関係ないわ。約半年前、担任教師の根岸真実の家庭訪問を受けた際、ママと師匠が対応したわ。何が起きたか、魔絶なエピソードを想定してっ」

「魔絶なエピソード？」

問い返したが、

『師匠と露美は淫辣な意を一つにして、根岸真実を無慈悲に犯したのだ』

と、直感した。

「そう、ママは女だてらに格闘技を身につけた猛者だと知ってるでしょ。関節技が得意。根岸真実の抵抗は儂いほど無力。師匠とママはシスター・キャラの同性をレイプするという犯罪を愉しんだ。でも、理不尽なレイプを受難した根岸真実は、あたかも性魔に魂を売ったかのように居直り、シスター・キャラからは想像もつかない淫乱女の本性を剥き出した……」

「レイプがレイプでなくなった」

「師匠とママは、交互に、居直って青白く燃える根岸真実とからみ、彼女の貌を特定できる耽美なからみを撮った。無論、私も、師匠とママの視野の中で秘かに恋慕してきた根岸真実と契ったわ。ママが手にしたビデオ・カメラのレンズに舐められながら……」

「まるで性地獄絵だ。ぞっとする……」

慄然とし、一時、脳裏が緋色に染まった。しかし、師匠と露美に犯されて居直った根岸真実のしたたかさに妖しいおののきを感じた。師匠はカトリック系名門女子学園を強請るネタを掴んだことになる。

『師匠の意図は何だろう？』

師匠の腹の内は読めない。

背後に特有のフェミニンな芳香を放つ露美の気配を感じた。

『私が注釈をつけるわ。単純な強請が目的ではないの。名門女子学園の教義を踏みつけ、性道義を嘲る聖香の性生態が露見した時、同学園に対して使える担保を取ったのよ。聖香の退学処分を免れるための担保を取ったのよ。スキャンダルを好餌にする一部メディアの毒牙は鋭いわ。万が一社会的に許されない非条理な情報が洩れたら、同学園が被る被害は甚大よ。この担保があれば聖香の退学処分を免れ、有耶無耶にする保険になる。聖香の学歴に汚点を残さずに同学園と太いパイプで繋がる一流私大に無条件で進学できる。無論、相応の裏金が要るけど……』

露美の魔妖な囁きが脳裏に染み入った。

「根岸真実は同学園の幹部理事の養女だけど、その実態は養父の情婦よ。本人に白状させて、プロに調べさせた情報を確認したわ」

「万が一の場合は、二重の保険に護られる」

「そう解釈して欲しい。朝の時間は貴重よ。睦言遊びはほどほどにして、私の愛しい分身に美味しいアクメを上げて……」

背後から魔妖な囁きを重ねられ、右耳朶を優しく囁まれた。

【3】

>

午前十一時。

義紀は、明日、華道・華杏の会の定例会を催す江嶋家別邸に着いた。

華道・華杏の会、家元の早月杏里は、同会の陰の主宰者、富豪未亡人・江嶋艶伽と愛人関係にあり、単なるパトロンと情婦というありきたりの愛欲関係ではなく、強靱な絆で結ばれている。

『準備と会場のチェックを終えたら、艶伽に別邸近くのレストラン・カフェに誘われるはずよ。その後、艶伽の性奴になるの。そのステージは、源泉露天風呂と内風呂付きの別邸の離れ。性魔に化けた艶伽に仕えるの。掛け替えのない愛人の艶伽は超富豪未亡人……私の金の生る木、無限の金脈よ。妙な手抜きをしたら許さない。私の性奴、イコール、艶伽の性奴、という図式を脳裏に刻みつけなさい』

師匠の教唆を嘸み締め、師匠への忠誠心を疼かせた。

歴史の浅い華道・華杏の会の会員はまだ二〇〇人に満たない。会員は上流階層の婦女子に限られているが、会員の定額会費だけでは運営、活動資金は賄えない。同会代表・早月杏里のパトロン・江嶋艶伽が新興華道・華杏の会の陰の主宰者だ。巨強なマネー・パワー、上流人種に人脈を持つ彼女からの潤沢な資金支援、後ろ盾が同会代表である家元・早月杏里を支えている。

早月杏里に飼われる忠僕を自認する義紀にとって、富豪未亡人・江嶋艶伽は雲上の存在になる。今一度、飼主である麗しき毒婦……隷愛する早月杏里の教唆を嘸み締めた。飼主に刷り込まれた女尊男卑のイズムに歪みはない。

『雲上の存在の富豪未亡人……今一人、麗しき毒婦と呼びたい江嶋艶伽とセッ

クスに耽る悦楽は性奴冥利に尽きる。必ず課せられたノルマを果たす……』

自らを鼓舞し、濡場でエロトマニアに化ける性奴の矜持を冴えさせた。性魔の別貌を持つ麗しき毒婦のパトロンは、妖魔の別貌を持つ麗しき毒婦という構図を反芻した。

通常概念にとられな和趣建物……広大な敷地内の本館とは別棟の離れの十畳強の和室が性宴の場になった。

漆喰塗りで聚楽調紺藍色。照度をコントロールされる間接照明、壁面の四隅には和紙張りの半埋行灯。十六様の等身大春画とH七尺W二尺のミラー六枚が組み込まれた壁面は漆喰塗りに紫紅色。開口部は壁面に近似した同色聚楽調布貼り戸襖と、床面からH二尺W六尺の白木格子の引き違い障子。床面の一尺幅の桜無垢板張り。壁面より一尺ほど内に敷かれた四方形の緋絨毯はチンチラ。床の間になる六尺四方のスペースの壁面と天井面は、漆喰塗りに艶消し紫紺色。安置された等身大燻銀仕上げの木彫・阿修羅立像が、ソフトにライト・アップされ、麝香系の香が焚かれている。

桁外れの富豪未亡人・江嶋艶伽が金に糸目をつけずにつくらせた部屋……情事を愉しむ閨房だ。嗜好に合うセックスをエネルギーにする麗しき毒婦のこだわりが窺える。

寝具は絹生地羽布団。着替えた閨房着はシルク・ガウン・タイプ。『隷愛する飼主・早月杏里とは異質の麗しき毒婦の性快樂の具にされる果報を堪能できる』

妖しいわくつきで鳥肌立った。

「ウフフツ、悪趣味な部屋でしょ？」

「悪趣味とは思いません。壁面に組み込まれた十六様の春画に魅入られます」

「私の表裏を熟知する毒婦の杏里は、私を美魔毒婦と形容するわ。その内、義紀もその言葉の深意が分かる時がくるわ。十六様の春画のマテリアルは、古典

枕絵本から抜粋した十六体位よ。作者不詳の原本は秘蔵している。この部屋のつくりから、私の性嗜好が読めるかしら……」

「およそ読めます。この春画の作者は？」

「杏里が春画の贋作を描かせている絵職人とは別の初老のアーティストよ。妖沙という朱の刻印が捺されてるわ。制作期間はやく六ヶ月。計算上は一体位になるけど、希少性を考慮するとその額以上の価値がある芸術作品よ」

奇異な感銘を受けた義紀は、燻銀・阿修羅立像に視線を移し、美魔毒婦の答えを引き出した。

「年代物の阿修羅立像も制作時期、作者不詳よ。神仏像補修職人も、杏里の息座に三、五〇〇万円相当の金塊を埋め込ませて

補修させ、彼の仲間の塗り職人に燻銀加工させた逸物だわ。万札八〇〇枚のコストは万札四、三〇〇枚余りに……」

江嶋艶伽の庶民の金銭常識からかけ離れた金銭感覚に驚いた。江嶋艶伽の案内で見た離れ内外のたたずまいから、工事費積算額を大雑把に推算した。

和室の内装に使われた資材は総て本物だ。照明、空調、清浄換気設備まで含む内装積算額はおよそ五、〇〇〇万円。ウェット・スペース&パウダー・ルームの諸設備、内装の積算額は約二、〇〇〇万円。鏡面加工大理石、御影石、檜材を主材にした内湯殿の内装諸設備等の積算額は約三、五〇〇万円。自家源泉露天風呂の工事費積算は源泉関連を除いて約七、〇〇〇万円。一層階の木造躯体・和趣外装&諸設備工事費は約一二、〇〇〇万円。十六様の春画、木彫燻銀の

からみ絵のコストは二八〇万円

が掛かった中年の匠級職人。台

ストがプラスされるから、総コ

む内装積算額はおよそ五、〇〇〇

の諸設備、内装の積算額は約二、〇〇〇万円。鏡面加工大理石、御影石、檜材を主材にした内湯殿の内装諸設備等の積算額は約三、五〇〇万円。自家源泉露天風呂の工事費積算は源泉関連を除いて約七、〇〇〇万円。一層階の木造躯体・和趣外装&諸設備工事費は約一二、〇〇〇万円。十六様の春画、木彫燻銀の

阿修羅立像のコストを含むと三億

弱の金額になる。推算できない離れ専有の和

趣庭園、外構工事、敷地内私道からの導入路工事を除いた推算総額だ。合算す

『桁違いの富豪未亡人の金銭感覚に度肝を抜かれる……』

内心で啞然とし、

『美魔毒婦・江嶋艶伽は、自分の飼主・早月杏里にとって、無尽蔵の金脈になる……』

と、納得した。

上流階層にもレベルの違いがある。

『私も富裕層に入る女だけど、まだ富裕のレベルは低いわ。私の野望は、愛欲の絆で繋がったパトロンの富豪未亡人・江嶋艶伽のレベルに近づくことよ』

隷愛する師匠・早月杏里の野望を知っている。自らが担う仕事……雲上の存在の美魔毒婦・江嶋艶伽との耽美な情事を想って心身を引き締めた。

>

寝具のそばに立つ義紀は、凄艶な養父の顔を顕わにした美魔毒婦の手で対の

白絹閨房着を脱がされた。無論、ノン・ブリーフ。股間からはち切れそうに充

秘かに愛慕する美魔毒婦との白日夢のような情事は幾度も重ねてきたから、隷愛する早月杏里の名器とは異質

な凄味のある名器を熟知している。美魔毒婦固有の妖しい女香、エロスが宿る女身の温もりを

と条件反射するようにシンボルが凶淫に勃起する。隷愛する飼主・早

月杏里に植え込まれた女尊男卑のイズム、性奴の矜持と習性は変えられない。

「素敵なペ*スっ。私が理想とする男性器そのものよ。昨夜、義紀とからむ濡

場をイメージして、夜半過ぎまで悶々として寝付かれなかったわ。住み込みの

年下のビビッドな雌と午後八時から二時間余り

も糜爛なメーク・レズを愉しんだのに、義紀のタフなペ*スを

挿れたくてたま

らなかった……」

「自分も、昨日、家元から江嶋家別邸に行くように指示された時、嬉しさで舞

い上がりました。艶伽様に逢えるから……」

妖魔に化けて欲情を隠さない女君の悦ぶ言葉を返した。

寝具の白絹とチンチラ絨毯の対比が艶めかしい。四方壁面に組み込まれた

等身大春画群と、床の間のライト・アップされた燻銀木彫・阿修羅像、焚かれ

る麝香系の香が妖しい情緒をより謎めかしている。

美魔毒婦は予期しないタイミングで立位になり、白絹閨房着を脱いで無垢に

なった。暖色系の間接照明でより

エロジナスに映える女身……妖気を放つ三十

歳過ぎで加齢を止めたシェイプリーな裸身に見惚れ、目敏

くボディ・プロフィールを読んだ。

身長一七〇前後。豊熟のバストは八五前後、悩ましげに括れたウエストは五

八前後。セクシュアルなアップ・フォルムのヒップは八六前後。艶張りが素晴

らしい絹肌は真珠色。北欧系の美魔ミスを想わせる彫りの小貌。バック・シニ

アの艶としなやかさに魅惹かれる。

改めて、美魔毒婦・江嶋艶伽の艶姿に魅了された。

「義紀、私の裸身に魅惑される？」

生唾を呑み込み、深い頷きを返した。

「義紀の飼主の麗しき毒婦と比べたら？」

「家元も、エロスが化身した艶伽様の裸身は絶品、と魅惹かれています」

比較を避け、女尊男卑のイズムに添う褒め言葉を返した。

「ウフフッ、嘘でも嬉しい。愛してる、という嘘もついて……」

「秘かに愛慕してきました」

「進行形の愛慕？」

ると優に五億は越えるだろう。

血したシンボルを反り上げた。

事

知覚す

メイドに仕立てた私より二回り

も糜爛

なペ*ス

な

な

な

な

な

な

な

な

な

な

な

な

な

な

な

な

な

な

な

な

な

な

な

な

な

な

な

「はい。艶伽様への秘めやかでも強い愛慕にうつろいはありません」
「嬉しい睦言だけど、嘘っばい。義紀を飼う杏里の厳しい躰けが窺えるわ。マニュアル通りの睦言遊びは嫌っ。義紀の本心を知りたい。愛慕という言葉にまやかしはない？」
「露ほどのまやかしもあります。でも、江嶋閨の女帝の艶伽様は、自分にとって雲上の存在です。身のほどをわきまえぬ言葉は使えません。師匠と呼ぶ家の飼主です。艶伽様への愛慕は、隷愛する師匠を裏切るに等しい想いになります。師匠に知られたら、淫惨な折檻で、師匠に飼われるスレーブだと思ひ知らされる妖惨な恠気遊びを……」
「杏里の恠気はそんなに烈しいのね。裏返せば、それだけ義紀に執心してることになる。私も義紀に執心してるのよ。私との情事をフェー・クラブのワン・シーンのつもりでいたら許さない。私の愛欲は半端ではないわ。欲しいものは必ず我がもの物にする。その内、義紀を江嶋家に取り込む。愛慕という言葉が偽りでないという証が欲しい。壁面の春画のからみの一つで証して……」

壁面に組み込まれた春画の様…… 立ち花菱のからみを目指された。
『秘かに愛慕してきた江嶋艶伽…… 閨房ではニンフォマニアの妖艶な別貌を顕わにするノーブル・ウィドーに耽美なからみを欲求されるなんて、性奴冥利に尽きる……』

性奴の矜持をより冴えさせ、双眸に妖光を宿して妖気を放つ美魔毒婦の足下で半座位になると、その所作を待っていたかのように両手でヘアを掴まれ、秘淫な股間に引き寄せられた。

セックスをエナジーにする美魔毒婦の豊淫な性体験で凄熟した女性器は、脳裏が痺れるように美味しい。鋭敏なクリトリス、たわわに発達したスイート・スポット、伸縮自在の膣周囲筋、膣壁に無数に点在する触手と吸盤、潤沢な性蜜、凄味の括約筋…… 並みの贅

崇めたいほど愛慕する江嶋艶伽…… 濡場で淫蕩な妖婦に化ける美魔未亡人は念密なクリンクスを好む。柔らかな真珠は神経が剥きでたように過敏だ。すばめた唇で吸い取ると、エロジナスな下肢に特有の微痙攣が走った。

『師匠・早月杏里の忠僕の身を忘れてしまう。やばい……』

江嶋艶伽と早月杏里の絆は強靱だ。気脈を緻密に通じ合っている。自分の性奴ぶりも筒抜けのはずだ。呆けて課せられた仕事を疎かにすれば、直ぐ、師匠に知られ、酷い仕置きを受難し

右手の二本の指を挿れて熟知したスイート・スポットを捉えて弄び、強い愛慕の念を籠めたクリンクスを強めた。

「ウーン、凄く感じる。淫魔の杏里が偏執する性奴の美味しさが分かる。私の淫貪なカ*トはもう性蜜の坩堝になってるでしょ。美味しい？」

分かり切ったことを聞く美魔毒婦の睦言がたまらない。

頸で深く頷き、

『極上のご馳走を貪れるなんて、無上の果報だ。惚けてはならないと分かっても脳裏が糜爛化してしまう……』

と心裏で本音を呟き、クリンクスとスイート・スポット罅りの密度をより高めた。

「淫靡な音を立てながら、好物の獲物にありついたケダモノのようにシャブリ回して……」

発情した美魔毒婦のあからさまな欲求に舞い上がった。

『秘かに愛慕してきた桁外れの富豪未亡人・江嶋艶伽は、自分の将来の運命を左右する女かもしれない。魔が差した運命の女神が美魔毒婦に乗り移ったように感じる。麗しき毒婦・早月杏里に魅入られて忠奴になったように、魅入られ

た美魔毒婦・江嶋艶伽の忠奴になりたい……』

骨の髄まで女尊男卑のイズムに染まった男独特の願望を膨らませ、自らの性炎に油を注いだ。

嗜好に添う濡場で魅せるノーブル・ウィドーの別貌……偏執ニンフォマニアの性情を剥き出した凄艶な夜叉の生態に烈しく魅入られた。ムーディなライティングで痴狼に映える二人のからみは、壁面四方に効果的に配されたミラーに映り込んでいる。崇める女尊を糜爛に廻り愛しむ淫靡な音と、発情した雌と化したノーブル・ウィドーの痴淫なヨガリ声が閨房の空気を淫らにし、淫魔です

ら魅入られる耽美な情景は並み

の形容を寄せ付けない。
義紀は恥辱にまみれてヨガリ狂う美魔毒婦に性奴の首輪をつけられたい。と渴望し、一心に媚びた。与えられた好餌を貪り喰らう性獣もどきになり、愛慕するノーブル・ウィドーを限辱に廻る快樂に呆けた。

>

義紀の貌上でアクメから醒めた美魔毒婦は岩清水の体位を崩して義紀の貌を覗き込み、双眼を異様に煌めかせる。

「ネエー、義紀。私をさかさまにして姦って……」

壁面に組み込まれた十六様の春画の一樣・松葉崩しのからみを望まれた。だが女性にはハードなラーゲだから、一瞬、躊躇した。

「杏里とも愉しんでるらーげの一つよ。馴れてるから躊躇わないで……」

「エッ、家元と？」

「双頭のスグレモノを挿れ合って、ハードなラーゲになるけど女と女の松葉崩しを愉しんでるわ」

「……………」

淫魔に化けた美魔毒婦と性魔の別貌を頭わにした麗しき毒婦……女盛り真っ只中の江嶋艶伽と早月杏里がつくる耽美なからみをイメージして逆毛立ち、絶句した。だが、骨の髄まで性奴の習性が染み込んでいる。

義紀の飼主・早月杏里に、

『義紀の異能は並みの性豪が霞む悪魔的なポテンツと、ニンフォマニアの底なしの性欲に応えられるタフなベ*スよ』

と、折紙をつけられた性奴のプライドを疼かせた。淫血の滾りがより烈しさを増し、淫痛を覚えるほど性器が充血した。

「妙な手心は嫌よ。私をアクメ地獄でのたうち回して疑似痴呆させなければ怠慢と解釈して、明日の華会を会場の準備不備の理由で中止にするわ。華道・華杏の会の陰の主宰者は私なのよ。会員門人二百余名は総て私の息が掛かったセレブ女性達だから、私の鶴の一声で私の意に従う。杏里が皮算用した会員からの寄付金という名の上納金も入らない。家元・早月杏里の面目は丸潰れになるわよ。麗しき毒婦と呼ぶ義紀の飼主……密に気脈を通じる杏里は信頼する愛人だけど、パトロンと情婦という絶対主従の力関係があることを忘れないでね」

奸辣に脅された。

新興華道・華杏の会の実権を握るのは代表であり、家元である早月杏里ではなく、陰の主宰者・江嶋艶伽だと熟知している。彼女の性情は非情だ。強力なマネー・パワー、富裕階層、政財界重臣に多くの有効な人脈を持つ彼女のバック・アップがなければ、新興華道・華杏の会の組織は崩壊し、飼主・早月杏里は多大な利得を失う。

「お願いします。そんな無慈悲なことを……」

「義紀の精進次第よ。魂を私に売りなさい。私の忠奴というタトーを刻みつけから……」

重ねて脅された。嗜好に合うセックスをエナジーにする美魔毒婦の利己と力の論理に圧倒され、一時、面妖な屈服感で脳裏が痺れた。

『艶伽様に魂を売ります。絶対忠奴になります』

心底で悲願した。脳裏の何処かでガラスの緋球が弾け、隷愛する早月杏里の忠奴というタグを越える江嶋艶伽のプラチナ・タグが見えた。両膝を折って腰を沈め、江嶋艶伽の両膝を裏側から抱え上げて逆立位を強い、性蜜でぬめった秘淫な股間を上向きに晒し出した。

「オォーン、恥ずかしい。義紀の色情狂っ」

マゾ性を覚醒させた美魔毒婦の罵りが睦言に聞こえ、身のほど知らずの愛慕が強烈な隷愛に妖変した。両肩と後頭部と拵げた両腕で自重を支える美魔毒婦の馴れた動きに安堵し、心にもない睦言は反意語だと直感した。

「後生よ。卑猥な隠語を浴びせたりしないでね。こんなに猥褻なポーズを強いるエロトマニアが恨めしい……」

「艶伽様に命じられた務めです」

「艶伽様と呼ばないでっ。今、性奴の義紀に淫辱に弄姦されてる雌は、江嶋一族の女君ではないわ。色情狂の娼婦よ。艶伽、と呼ばひ捨てにしてっ。淫売、売女、色情女、色気違い、と罵倒されてもいい。手心抜きで辱姦してっ」

信じがたい睦言だ。だが、その気になった美魔毒婦のマゾ性の覚醒を感じ取った。

「艶伽様の言葉を信じても……」

「私の忠奴の首輪をつけてやる。隷従しなさい」

身に余る光栄だ、と胸内で叫び、悦涙で潤ました双眼で、『無条件恭順、絶対忠奴……』の誓いを立てた。

強烈な磁力に引きつけられるように美魔毒婦の上向きの股間に跨がり、凶淫に猛ったペ*スの根元に右手指を添え、グランスでスリットをくじり裂いた。

「ウギユ……」

淫呻が嬉しい。

『馴れている。淫絶な姦り方をしても大丈夫だ』

安堵したが、強靱な愛欲の絆で結ばれた江嶋艶伽と早月杏里の耽美な松葉崩しのからみを想像し、滾った淫血がクワツと熱くなった。淫魔、性魔の別貌を顕わにした美魔毒婦と麗しき毒婦……江嶋艶伽と早月杏里が決して萎えないスグレモノを挿れ合っつくる松葉崩しの耽美な濡絵に戦慄した。

「もう義紀は、私の特別のスレーブよ。性奴に松葉崩しで辱姦される悦楽を堪能させて……」

魔絶な睦言に煽られた。

『夢のようだ。性奴冥利に尽きる……』

腰をじわじわと低めて根元まで抉り挿れた。

「ウゥーン、太くて、長くて、猛々しい。麻薬でコーティングされたペ*スみたい。今、私は淫乱なガリーよ。やりたい放題に姦って、歪んだ淫蕩な性情をもっと歪ませて……」

演技とは思えないノーブル・ウィドーの狂態染みた睦言に感激した。

「自分にとって艶伽様は女尊の存在です。そんな身のほど知らずの蛮行はできません。家元に知られたら、男根を削ぎ落とされるとような折檻をされます」

「本音をいいなさい。性奴を視認していても、雄特有のプライドが心底で疼く

て上げる。いずれそうなるのだ

はずよ。江嶋一族の女君を自認する江嶋艶伽……傲慢、独善、我が侬、非情な美魔毒婦を自認する私を辱姦したいお前の潜在欲望が透けて見えるわ」

心の闇を抉られ、返す言葉を失した。

「私と杏里の主従関係を想えば、私の欲求を拒めないでしょ。妙な心遣いは仇になるわよ」

決め付けられ、惑妖して小さく身震いした。

華道・華杏の会に関わる場面では早月杏里を師匠とは呼ばずに、家元と呼び分けている。ギャラリー・杏里に関わる場面では社長、その他の日常シーンでは師匠と呼び分ける麗しき毒婦に刷り込まれた女尊男卑のイズム、飼主への絶対隷従忠奴の矜持は骨の髄まで染み込んでいる。気持ちをサドっぽくシフトしても、魔絶なパワーを持つ美魔毒婦との力関係は変わらない。加虐的な松葉崩しのラーゲとは真逆。義紀の方が美魔毒婦にねじ伏せられ、心魂を鞭でしばかれて生じる被虐悦が深まる。

「妙な手加減をしたら、義紀を飼う杏里に仕返しするっ。華杏の会への支援を一時的に止めて、私の息が掛かるセレブ女性門人・会員を暫定脱会させるわ」

台詞のトーンは甘い、中身は、早月杏里を絶対女主人とする義紀には効く

脅して試されている、と分かっているにも悪寒戦慄した、美魔毒婦の蜜の坩堝に呑み込ませたシンボルを凶淫に脈打たせた。

『精一杯、居直ってやるっ』

美魔毒婦の淫辣な思惑通り、惰眠した自らの雄の性本能を刺激したが、『所詮、自分は性奴を甘受する男だ。美魔毒婦に操られる性奴役を本音で演じてやる。自分の特能はセックスだ。秘かな愛慕が強烈な隷愛に変わった江嶋艶伽に忠奴の首輪をはめられたい。是が非でも、その願望を叶えたい』

と、自身を駆り立てた。

逆立位を悦受する美魔毒婦……イメージするウェヌスの裸身に近い女尊の両足首を両手で掴み、隷愛する飼主に刷り込まれた女尊男卑のイズムとは相反するサド性を覚醒させ、自らに鞭を入れた。

十数分間、松葉崩しの体位を崩さずに淫絶な交尾に耽溺し、意味不明なヨガリ声を上げ、全身に特有のクリックを断続させて喜悅する美魔毒婦に重なるアクメの果ての疑似痴呆を強いた。

>

美魔毒婦は義紀の腕の中で疑似痴呆の淵からしたたかに蘇った。

「興奮の余り、歯止めをなくした自分を許して下さい」

アクメの余韻が尾を引く江嶋艶伽にスレーブっぽい語調で神妙に詫び、通じた妖しい気脈で媚びた。

「何故、謝るの？手心抜きで私を疑似痴呆の淵に沈めてくれたから、特別の褒美を上げたいわ。こんな至福感は始めて……」

淫酷な報復を受けるのではないかと、という危惧が消え、胸を撫で下ろした。

「杏里に飼われる義紀って、本当に美味しいスレーブっ。ごく普通の男だった義紀を忠奴に仕立て、隷従心、性奴の矜持を植え込んで躰けた杏里の調教の術に感嘆する。私は使えない男は配下にしないわ。義紀、私への絶対忠誠を誓える？」

「もう自分は江嶋様の奴隷です。命に換えて絶対忠誠を誓います。江嶋様には絶対隷従します」

「殺人を教唆されても？」

「無論、従います」

「あり得ないことだけど、義紀の飼主・早月杏里を殺す教唆でも？」

「……………」

美魔毒婦の辛口の睦言に鳥肌立ち、数秒間、呼吸が止まった。

「隷愛する早月杏里を殺せる？」

拷問に等しい問いを重ねられ、

『殺せる……』

と目顔で答えた。

艶然と微笑む美魔毒婦に身体を重ねられた。

「その言葉を証す日が来ないこと望むわ。華道・華杏の会についてお復習いしておきたい。華杏の会の真の主宰者は、私・江嶋艶伽だと分かっている？」

睦言の中身が変わった。

「分かっています。華道・華杏の会の盛衰は、同会代表・家元・早月杏里のパトロン・江嶋艶伽様の匙加減次第です」

「同会の会員・門人のほとんどは、江嶋一族の女性達と、私の息が掛かる上流社会の婦人達よ。パトロンにもピンからキリがあるわ。杏里のパトロンを気取る好色な地元政界重臣がいるけど、江嶋一族の女君といわれる私と彼のマネー・パワーだけを比べても月と鼈の違いがあるわ。もう一人の杏里のパトロンの認んじる生臭坊主は、不倫関係を構築した富豪檀家の夫人達から多額の浄財？をせしめている不浄和尚よ。二人とも麗しき毒婦・早月杏里の手練手管におちた男だけど、華道・華杏の会への寄与は高がしれている。杏里は金よりも二人が持つ人脈をせしめて、ギャラリー・杏里の商いに利用して荒稼ぎしている」

「およそのことは知っています」

「そして、義紀のこと。杏里から私に差し出された生贄でもあるのよ。分かっていた？」

『ハイ、分かっています』

義紀は潤ませた双眼で答えた。

「義紀の身は私の自由にできる。飼主は早月杏里、彼女のパトロンは私・江嶋艶伽という今までの図式が変わるわ。私への絶対恭順に二心はない？絶対隷従を誓える？」

単なる睦言遊びではない、と直感し、

『命にかけて誓います』

と、顎で深く頷いた。

屈服を強いられる奇怪な快感で身震いし、隷愛する麗しき毒婦・早月杏里に課せられた情事に不手際があれば、必ず、淫惨な折檻を受難する。一週間余り前、師匠との濡場での戦慄シーン……師匠に教唆されたギャラリー・杏里の顧客のセレブ女性との情事で不手際があり、古美術品の売買が不調に終わった日の深夜の性受難の記憶は生々しい。別邸の特別の閨房で、柳眉を逆立てた師匠の淫絶な性折檻を受難した。無論、師匠の情婦でありマルチ秘書であるクールな才女・飛高真希も同衾していた。

『お前のシンボル、根元から削ぎ落としてやるっ』

師匠に猟奇じみた台詞を浴びせられてマゾ性を覚醒させ、青白く燃える師匠と真希の無情の性折檻……充血したベ*スの根元をゴム製の輪っばで絞め付けられて時雨茶臼の体位で、二人にサディスティックに嬲らされ、延々と射精寸前の悶悦を強いられた。その場面で魅せられた師匠の柳眉を逆立てた凄艶な夜叉貌を思い起こし、

『飼主の私に女尊男卑のイズムと性奴の矜持を刷り込まれた義紀の異能は、突出のセクシュアリティよ。タフなペ*スを根元から削ぎ落とされたら、お前の存在価値はゼロになる。去勢された雄に雌を惹く魅力はないわ。飼主の下僕を甘受する以外に、生きる術はないわね』

と、囁かれた辛辣なピロー・トークまで思い重ねた。

直ぐ、美魔毒婦に惑妖した心裏を読み取られ、
「また、同じラーゲで淫絶に姦られたい。命令よ。マゾ雌をサディスティックに姦って……」

と 囁かれた。

蒼白い性欲を滾らせる美魔毒婦に隷従する悦びを嘸み締め、
「ハッ、ハイ……」

と従順に答え、催眠されたかのように気持ちをサド彩に染めた。
「淫乱雌の卑忘を叶えてやるっ」
不可思議だ。美魔毒婦に操られて吐く台詞までサド彩に変わり、全身に凶淫なパワーが漲った。

「嬉しい。淫乱女の歪んだ性根をもっと歪ませて……」

「フン、淫売女めっ。情け容赦なしに姦ってやるっ」

蒼白な性炎がメラメラと音を立てた。

マニャックな嗜虐性交に馴れた女身を逆さまに抱え上げ、両肩と後頭部で自重を支えさせた。

「上から貫く前に、卑猥な音を立てながら口で廻り回して、ヒィヒィーとヨガリ狂わせてやるっ」

悩ましく括れたウェストに左腕を巻き付け、潤滲した性蜜でズルズルになったスリットを射るように視姦した。

「淫血が沸騰するレアな眺めなのに、神々しいまで綺麗だ」

ケアが行き届いた秘部に見惚れ、

『女尊は創造の神が創ったアートだ』

と感動し、熱い視線を突き刺した。

「ウーン、恥ずかしい。お願い。視姦しないで……」

「屍姦されるのが好きなくせに、嘘をつくなっ」

「意地悪……」

「マゾ雌らしく、素直に喜べっ」

鼻頭でスリットをなぞり上げた。

「アーン、義紀様の色情狂……」

「今のお前は江嶋一族の女君ではない。ノーブル・ウイダーのマスクを剥ぎ取られた色情狂のガーリーだ。セックス亡者めっ。美魔毒婦の仮面も剥ぎ取ってやるっ」

辱虐に罵倒し、性蜜で濡れたスリットに半開きの唇を吸着させた。

「オッギユッ……」

マゾっぽく燃える美魔毒婦の錯愕の呻きが耽美な情景をより扇情的にした。

『罰が当たりそうな性快樂だ』

十数分間、猥褻な口姦に耽り、心酔する美魔毒婦を淫狂さながらにヨガリ狂わせてから性蜜まみれの股間に跨がった。腰を使って怒張したグランスでスリットを割り裂き、

「貫かれないかっ」

と廻り、挿入の所作を止めて焦らした。

「アウツ、意地悪っ。早く挿れてっ。根元まで突き込んで……」

ノーブル・ウィドーのたたずまいからは想像もつかない淫貪なマゾ雌ぶりに感激し、凶淫に猛り狂ったコ*クを根元まで抉り込ませた。

「ウギユツ……」

「嬉しいか？」

「最高っ。デビルに貫かれたみたい。太くて、長くて、張り出たグランスが素敵……」

ハードな松葉崩しの体位を難なくこなす柔軟な女身、タフな名器を褒称する言葉がない。十数分間を費やして美魔毒婦をエクスタシーの淵に溺酔させ、自身も異様なクライマックスに舞って烈しく射精した。

>

ハニー・ブレイクを挟み、用意されていたレモン・フレーバーのポンチで渴きを癒やした。アップ系のソフト・ドラッグが混入されてるようで、気持ちの淫らな昂揚を体感した。

秘本・枕絵本表四十八手の内の十六体位をマテリアルにした等身大春画が組み込まれた四方壁面には、三×八寸のミラーが不規則に組み込まれている。耽美なからみのほぼ総てが映り込む仕掛けだが、あからさまな低俗性がない。

『おそらく、この部屋の何処かに、複数の小型高性能カメラ、小型高機能ビデオ・カメラが巧妙に仕込まれているはずだ』

さり気なく部屋中を見回したが見当たらない。美魔毒婦に目敏くその所作に気付かれ、

「カメラの仕込み場所を知りたいの？」

と、淫忍に問われた。

「部屋の凝ったつくりに見惚れていただけです」

見え透いた嘘でつくろった。

「二つのカメラのリモコンよ」

著しく親近感が増した美魔毒婦の右手に、二枚のカード・タイプのリモコンがあった。

『いけない趣味です……』

アイ・ランゲージで揶揄した。

「貴重な映像をメモリーするのは常識よ。車のドライブ・レコーダーのような側面もあるわ。この間、この部屋で、杏里と愉しんだ耽美なからみもメモリーされてるわ。私を強請れるネタに情報だから、杏里にもそのコピーは渡してないけど……」

「師匠を信じ切れないのですか。裏切りはあり得ないのに……」

「私は杏里の秘めた野望を見抜いてるわ。魔が差す、という例えがある。最も信頼する人間が最も危険、とう凶式は頂けない。私は麗しき毒婦・早月杏里を身内女にする腹だけど、魔が差した杏里が私のその本意を悪用しない、と確信できないら、その誘因をつくらない……」

身内女にする、という言葉に強く惹かれた。

「身内女に？」

「そう、江嶋家の中枢に入る親族にしたいの」

美魔毒婦が放つ妖気に鳥肌立った。

一瞬後、スマホの澄んだ着信音が小さく響いた。

「杏里からのメールだわ。義紀も読みなさい」

渡されたスマホの画面を一見で読み取った。

『秘かに艶伽を愛慕している義紀のタフな性奴ぶりは如何かしら？魂まで虜り弄んでも構わない。相応の値踏みをして……』

相応の値踏み、というワードに疑問を抱き、

「エッ、相応の値踏み？」

と、思わず問い返した。

「義紀を買うつもりよ。杏里のいい値で……」

冗談っぽく囁かれ、

「人身売買になります」

と、似た口調で答えた。

「戦力になる人材の金銭トレードよ。杏里に示される金額をのんで、義紀の内腿に江嶋艶伽という飼主の名を刻みむわ。削り取れないタトーよ」

「冗談が過ぎます」

「本気よ」

シャドー財閥ともいわれる江嶋一族で形成する閥の女帝・江嶋艶伽が持つ圧倒的なマナー・パワーは想像がつく。金が物をいう世相だ。人身売買に類似する行為は少なくない。

「杏里と義紀の強靱な絆を絶つつもりはないわ。早月ファミリーの相姦関係を承知の上で、早月ファミリーを丸ごと呑み込んで、腹心の身内にするむつもりよ。当主の早月杏里、マルチ秘書の飛高真希、義紀の内縁妻、早月家のパトラー・真中美都、彼女の非嫡出子・真中聖香、早月家のマルチ・スレーブの賀屋義紀……」

「本気ですか？」

「すでに杏里の同意を得たのよ。手始めに義紀を杏里と共有して、月内の半分は江嶋家に棲む身内男にする。必ず富裕指向が強い杏里が必ず呑む条件……杏里個人への多額の裏贈与と、江嶋家中枢に入れる身分保障を約束したわ」

「……………」

間違いなく新たな飼主になる美魔毒婦に気圧され、屈服を強いられる奇妙な悦びで芯髄が熱くなった。

「ウッフッフ、私の女尊男卑のイズムとルール、弱肉強食の道理が分かったようね」

予知通り、貌に跨がられた。

>

約一時間半。

淫蕩な性情を顕わにした美魔毒婦とからむ性果報を堪能した。

雲上の存在だった江嶋閥の女帝・江嶋艶伽に見込まれ、間違いなく新たな飼主になる美魔毒婦の忠奴になる幸運を体感した。

岩清水の体位で絶品の女尊……隷愛する女主人・早月杏里の極熟の名器とは異質な名器を与えられ、

「杏里よりも美味しい？」

と分かり切ったことを問われ、ヒップを細かく揺すられた。だが、口を性蜜まみれのスリット深くまで挟まれているから言葉を返せず、頸で肯定すらできない。

『脳裏が糜爛するように美味しい』

心底で眩きを返し、口に与えられたクリトリスを吸い取った。

「ウッウン、感じる。快感のエッセンスを注入されてみたい」

欲情した美魔毒婦の超過敏な感応が嬉しい。一瞬、隷愛する師匠・早月杏里の鋭敏なクリトリスをだぶらせた。甲乙つけがたい極めつけの性感部位だ。精魂までとろける性果報に惚け、練熟のオーラル・スキルで絶対隷従を誓うかのように柔らかな真珠を愛しみ馴染った。貪婪、淫猛な性獣の本性を本性を顕わにした新たな飼主・江嶋艶伽……美魔毒婦に隷従する悦びに蕩けながら、悦楽の美酒に酔い痴れた。

十数分後、美魔毒婦はエクスタシーの余韻から醒めた。

「義紀は、私が杏里に渡す三千万円相当の純金インゴット持ってまえることになるわ。今、杏里のスマホにメールする……」

眼前でその言葉を具現され、そのスマホで、江嶋家の陰の女帝といわれる美魔毒婦の異母妹・江嶋美沙をコールした。

「杏里に渡すアレをバッグに入れて、離れに持ってきて……」

岩清水のポーズのまま、こともなげに命じた。

『自分の意思は一切反映されない人身売買だ。でも、この脊髄に染み渡る至福感をどう形容したらいいのだろう……』

奇怪な歓びに震えた。

純金インゴットはすでに用意されていたようだ。数分後、江嶋美沙が純金インゴットを納めたズック製のボストンバッグを提げて部屋に来た。

「アッ、お邪魔みたい。このバッグ、何処に置けばいいの？」

緻密な姉妹関係が窺える語調で全裸の女帝に訊ねた。

「枕元に置いて。まだファックしたことのない義紀の美味しいペ*スを挿れてもいいわよ」

「エツツ、本当に……？」

「いいわ。もう、義紀は私の忠奴よ」

「家元と話しはついたの？」

「かたちは金銭トレードよ。その純金インゴットは杏里に渡す金の一部よ。杏里は長年飼育してきた義紀に執着してるから、当分の間、杏里と共有するかたちになるけど……」

「江嶋姓を名乗らせるの？」

「美沙の夫として入籍させるわ。セックス・スレーブとしては折紙をつけられるし、江嶋家の男として有能に機能させる。早月杏里を江嶋家の女にするための布石にもなる……」

「エツ、彼を私の夫に？」

「杏里に飼われて女尊男卑のイズムを植え込まれた義紀を江嶋彩の男……私と美沙の忠奴に仕立てるのは美沙よ。私は早月杏里とそのファミリーを呑み込むつもりよ。杏里のマルチ秘書・飛高真希、義紀の内縁妻・真中露美、彼女の分身・真中聖香も江嶋ファミリーにするわ」

「早月杏里は承服するかしら？」

「すでに話がついてる。あとは実行のみ……」

命運の激変を予知した義紀は、妖気を放つ美魔毒婦・江嶋艶伽の股間で呼吸を切迫させた。

『富裕人種にも格差がある。隷愛する師匠・早月杏里は富裕人種の内に入る女性だが、独特の閥組織の江嶋閥の女帝・江嶋艶伽に比べるとその格差は歴然としている。所有する個人資産で比較すれば、およそ一〇〇対一。江嶋家と早月家の対比では桁数が増える。巨大な財力を持つ女帝・江嶋艶伽に忠奴のタグ

をつけられ、彼女の異母姉……陰の女帝といわれる江嶋美沙の夫の座を与えられるなんて、夢想だにできなかったサクセスだ』

美魔毒婦の蜜壺の中で独語し、気持を昂ぶらせた。

「美沙っ。近い将来、夫という名のスレーブになる義紀と交尾みなさい。婚姻前の儀式よ。股間から逞しく反り上がったタフなペ*スを喰らって、舌鼓を打つといい……」

「嬉しい。婚約の契りね。全身が汗ばんでるから、シャワーを使ってから美味しく頂くわ」

義紀の飼主の一人になるはんなり妖婦・江嶋美沙は双眸を煌めかせ、予期していたかのような嬉々とした動線を残して隣接の内湯に移った。

江嶋艶伽は異母姉の動きを視認してから、岩清水の体位のまま腰を義紀の胸にずらせ、義紀を上から見据えた。

「三日前、杏里は朝帰りしたでしょ」

義紀は小さく頷いた。

「深夜、この部屋で、密談した杏里と白日夢もどきの性宴を愉しんだわ」

「……………」

強靱な愛欲の絆で繋がる女盛り真っ只中の二人の毒婦……緻密に気脈を通じる江嶋艶伽と早月杏里の濃厚なからみを連想し、生唾を呑み込んだ。

「無論、私と杏里の野望のすり合わせ……江嶋家に早月家を吸収する私の野望と、江嶋閨閥の内に入りたい杏里の野望を具現させる密談で合意したわ。その骨子を話すわ。江嶋閨閥のコアの内に入りたい早月杏里は妻に先立たれた私の老父・江嶋武雄の後妻の座につき、私の義母になる。杏里の忠奴の加賀義紀は私の異母姉……六年前に夫を喪った江嶋沙耶の夫という名の忠奴になる。義紀の内縁妻・真中露美は私の老父の付人を兼ねる情婦になる。彼女の非嫡出子・真中聖香と、杏里のマルチ秘書・飛高真希は私の養女になり、当然、私と異母姉・江嶋沙耶とリンクすることになる。勿論、真中露美も江嶋閨閥の陰の女帝ともいわれる私の異母姉・江嶋沙耶と濃密にリンクし、異端の才女・飛高真希は私の秘書の一人として機能する女になり、江嶋一族の相姦関係に適応する有効な戦力になる」

脅威の財力を誇る江嶋閨閥に君臨する江嶋艶伽の壮大な野望……腹心の身内を増殖させる女帝の奸辣な手法に戦慄し、隷愛する師匠・早月杏里から得ていた江嶋艶伽に関わる情報を脳裏で反芻した。

『江嶋艶伽はすでに富豪・江嶋家、巨大な資金力を誇る江嶋閨閥の名実共の覇権を握った権力者よ。江嶋艶伽にとって邪魔な長男と次男が消えた経緯の疑惑は、長い時間の経過で払拭されたわ。長男・江嶋辰雄は九年余前に忽然と失踪し、すでに失踪宣告を下され、次男・江嶋信治は覚醒剤の淵にはまり、四年余前に覚醒剤過剰使用でショック死をとげた。戸籍上義姉になる江嶋沙耶は妾腹の子で養女の身だから、江嶋家継承者としては二次的存在。長男の突然の失踪の疑惑、覚醒剤アディクトだった次男の覚醒剤過剰摂取によるショック死の疑惑は時間の経過で希薄になり、闇に葬られたに等しいわ。江嶋艶伽は不遜な野望通り、長年インセストでリンクしてきた父・江嶋武雄から江嶋家の覇権を継承し、隠匿資産を秘かに掌中にしたわ。無論、父・江嶋剛志が君臨した江嶋閥の覇権を握り、父の裏人脈……財界重臣、警察&官公要人、闇コネクションとの太いパイプも受け継いだ。私は六年余前に妻・江嶋絹絵を喪った江嶋剛志の後妻になり、真中露美の役柄は私の夫・江嶋剛志の情婦を兼ねるマルチ付人になる。そして、女帝・江嶋艶伽から教唆された江嶋剛志殺害の犯行に及ぶ。ク

スリでポテンツを得る色情狂老人との苛淫な情交の最中に彼を殺害する。死因は色情狂老人に相応しい閨房死……俗にいう腹上死。台本通り、密室での確信の殺害は不慮の腹上死に偽装されて犯罪にはならない。僅かなミスでそのシナリオが崩れても、確証のない密室での犯行を立件するのはほぼ不可能。疑惑は疑惑のままで終わる。最悪のケース……過失致死で起訴されたとしても、犯歴を持たない真中露美の判決には執行猶予がつき。実刑はあり得ない。勿論、鉄壁にガードするから、スキャンダラスな真相がメディアに漏洩する危惧はないわね』

　　瞼を閉じ、女帝・江嶋艶伽の忠奴になった自分……女帝の異母姉・江嶋美沙の夫という首輪をつけられた江嶋義紀の未来を想い、

『テリブルなヘッドに与えられるサクセスは未知だが、スレーブであることに変わりはない。江嶋家&江嶋閨閥の覇権を握る江嶋艶伽、江嶋沙耶の忠奴の矜恃を持つ男になり、心身が擦り切れるまでこき使われるだろう』

　　と、本能的に悟った。